

『現地を訪問して想うこと』

B 宮城県コース
2009卒 法学部
石村 若菜

「もっと早く被災地へ行くべきだった」

今回、東北応援ツアーに参加して一番感じたことです。

東日本大震災から年月が経ち、参加する前は、復興は着々と進んでいるように思っていました。ところが、被災地の校友の方々とお話し、自分の考えの甘さに気づかされました。各種マスメディア報道からも、震災の話題は優先順位が下がり、我々被災地以外の人間の目に触れる機会がどんどん減っています。その理由は決して復興が進んだからではないことに、南三陸町・石巻市をはじめとする宮城の街並みを見て痛感したのです。

私自身は、生まれも育ちも、そして現在に至るまで大半を関西で過ごしています。幼い頃に経験した阪神大震災の記憶が、年月とともに人々の中で風化しつつあることに、不安を感じていました。同じように風化させないために、現地を見たいと思ったのが、ツアーの参加動機ですが、震災から1年7か月経過して、初めての訪問でした。

南三陸町で、多くの報道があった防災庁舎を訪問しました。見上げるような高さの庁舎を津波が襲ってからもう1年半以上経過しましたが、庁舎の周辺には家屋の土台だけが残された土地が続き、1か所に集約されながらも瓦礫の山々が広がっていました。

初日に訪問した松島でも、震災当時は島と陸地を繋ぐ橋が陥没等の甚大な被害があったようです。震災前の風景を知らない私にとって、まるで震災などなかったかのように感じられるほど、美しい海・島々が広がっていました。

ソーシャルメディアが広まり、誰でも瞬時に情報を手に入れられる時代ではありますが、自分の目で物を見て、考えることの大切さを痛感したのです。

もう一点感じたのが、「人々の絆」です。

勉強会では、震災で被害を受けた水産加工会社を運営される校友会の方から、工場再興のための厳しい生活、これまでの道りを伺いました。その中で、政府からの補助金に対して、現実に即していないのでは、との自分自身での問題提起にもなりました。

また、私事ではありますが、現在勤務している会社のグループ会社の社員の方々と、関西・関東から遠く離れた南三陸町の復興市で出会ったことも「絆」を感じる一因となりました。

最後になりますが、今回のツアーを企画・主催してくださった校友会の方、コーディネーター他関係者の方には深く御礼を申し上げたいと思います。ツアーを通じ世代・出身地・仕事等多様なバックグラウンドを持つ方々との出会いがあり、「立命館の絆」を強く意識しました。卒業してから「母校としての立命館」を意識する瞬間が乏しかったため、大きな発見でした。

月並みな言葉でしか表現できない自分をもどかしく思いながらも、日々の生活に感謝し、また東北の地を訪れたい、そう感じた貴重な2日間でした。